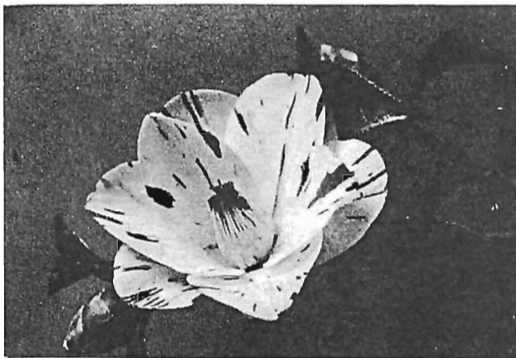


大阪薬科大学広報委員会

ツバキ



春の台 (日本)

ツバキ属 (Camellia) は東南アジアに分布し、100種ほどの種類があるが、これに次々と作り出されるツバキ、サザンカの園芸品種を入れたら大変な数になる。日本にはヤブツバキ、ユキツバキ、ヤクシマツバキ、サザンカが自生している。またチャノキ (茶) の自生が数個所で報告されているが、これは栽培品が野生化したものだろうと云われている。このチャノキについてはかつてツバキ属とは別にチャノキ属 (Thea) として別属に分類されていた。薬学関係では今も多くの本がチャノキ属として記載しているが分類の専門家がツバキ属に入れている以上我々の方でもこれにしたがうべきであろう。ただ成分面ではチャノキがカフェインを多量に含有する点でツバキ、サザンカなどとはかなり異なっており、成分面を重視する我々としてはチャノキ属として残したい気がする。

ツバキは品種によってかなり花期が異なり12月頃に咲くものから4月頃に咲くものまでいろいろであるが、3月頃に咲くものが多い。ツバキには日本で椿の字をあてるが、これは春に花の咲く木から作られた和製漢字と考えられ、漢字の本来中国においては、ツバキに対する字

は山茶である。一方椿の名をつけた植物が別があり、これはツバキとは全く異なるセンダン科のチャンテンのことである。このように日本と中国とは同じ漢字をあてるが異なる植物を指す場合があり注意を要する。

ツバキは種子から採るツバキ油が化粧用、灯用、薬用として重要なものであったが現在では化粧用製剤用基剤として少し用いられる程度である。しかし観賞用花木としては愛好家が多い。ツバキが花木として重要な地位を占めるようになったのは室町時代に入ってからであり、茶の湯に関連して庭木として、また茶花として賞でられるようになった。有楽斎遺愛の有楽ツバキ、秀吉遺愛の佗助などは有名である。観賞用栽培品種は日本が一番古い歴史を持ち、立派なものが現在に受けつがれており、関東の品種、中部の品種、関西の品種、北陸の品種、四国・九州の品種とそれぞれの文化、気候などを反映した特徴のある品種が出ている。近年ブームに乗ってアメリカで作られた品種が多数里帰りしてくるようになったが、いずれも日本的なツバキとはどこか異なる華やかなものが多い。

(小澤記)



ビルドナント (アメリカ)

●施設紹介●



体 育 施 設

助 教 授

望 月 伸 三 郎

助 手

新 宅 幸 憲

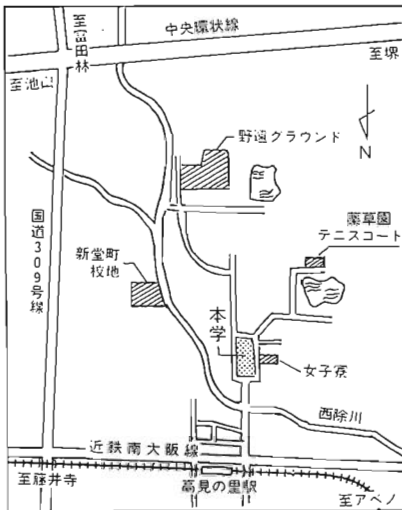
左から望月伸三郎助教授，新宅幸憲助手

本学の体育施設を紹介するにあたって、先ず本学附近の見取図を見ていただきませんと、その所在がわかりにくいと思います。見取図の南から順に辿ってみますと、野遠グラウンド、薬草園のテニスコート、本学にグラウンドと体育館があり、体育の授業に使用されております。

その他、女子寮西側にテニスコートと弓道場があり、本学から少し離れた東の方に新堂町の校地が整地されずにあります。体育施設は本学の歴史的発展経過をそのまま物語って変化しているようですので年代順にその施設を紹介してゆきます。

本学グラウンド

昭和7年10月に現在の位置に新校舎を建てて守口市より移転して来ました。それから今日まで50年を数えます。50年前の本学は大学配置図に見られる敷地を有し、建物は本館以外に建っておらず、敷地の南端に学生寮があったと伺っております。したがって、当時は本館と学生寮以外はグラウンドでその広さは現状の4～5倍はあったと思われる、全く羨しい広さだったと云えましょう。昭和20年代に大学となってからの発展経過を追ってみますと、S28年に図書館、S34年研究棟、S37年東館、S38年西館、S41年動物舎、S42年体育館、S43年東第二新館、S45年西別館、S51年排水処理施設、S53年実習棟Bが建ち、その他に体育系クラブ室、自動車駐車場も増設されました。その間にS41年には学生寮移転もあつ



附近見取図



運 動 場

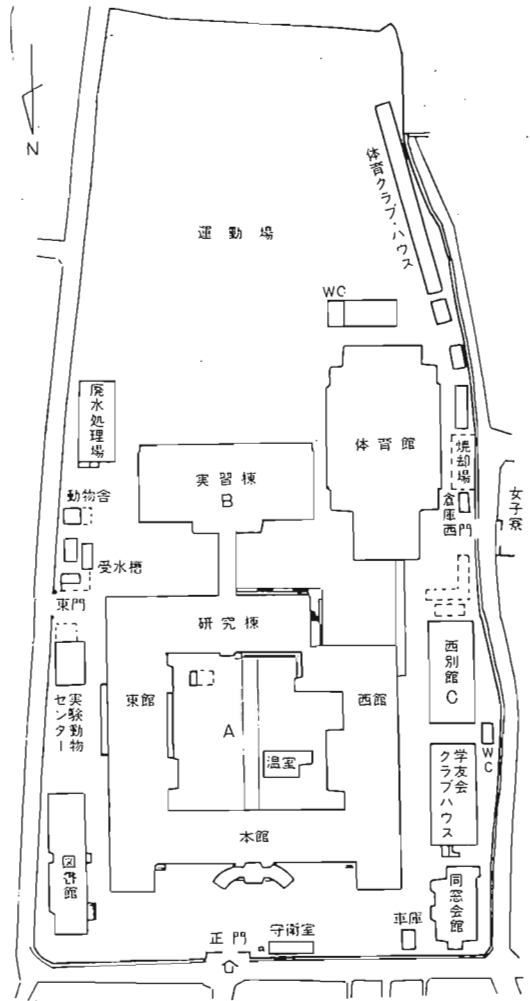
て、やや広がったと云ってもグラウンドの面積が如何に狭められたか御理解いただけると思います。

更にS43年度から学科増設、S50年度は大学院設置、S51年度より学生定員数の増加があって体育施設の不便さは、狭くなったグラウンドで拍車がかかり、陸上競技、野球、サッカー、ラグビーなどのスポーツは事実上困難な状態になってしまいました。今では授業時間にハンドボールコート2面を使う他に、学友会主催のソフトボール大会や、雨天時のサッカー、ラグビー練習に活用する程度です。S55年度に高鉄棒4連と砂場、低鉄棒4連が設置され、またグラウンドの片隅には自動車のタイヤを埋め込むなど個人トレーニングの場としての工夫もしておりますが、積極的に取り組む学生は少ないようです。授業時間の休憩時や実験、実習の合い間に気分転換の場としての整備を計り、その活用法を考えてゆかなければならないと思っております。

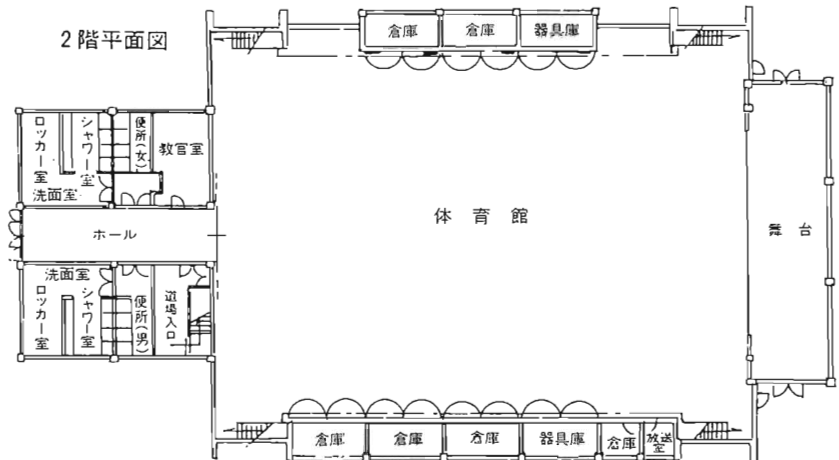
体育館

現在の体育館はS42年度の竣工であるから既に15年を経ている。今は豊かな時代になって個性的特徴が尊ばれる時代になった。その意味でいくと体育館は体育館、講堂は講堂としての個性が必要である。しかし本学の体育館は講堂と倉庫の3者兼用で多目的利用の建て方が採用されている。体育館は活動の場であるから体温の上昇、発汗作用を考えると通気性に富むことが必要であるが、ステージや倉庫の設置で通気性の悪いこと夥しい。それに講堂としては音声効果が良くないので、大祭では松原会館を使って高い借用料を払っていると云った具合である。体育館としてのフロア面積は約 $37.5m \times 25.5m = 956m^2$ であるが、せめてバスケットボールコート2面が正規にとれる 38×30 ぐらいあると申し分ない広さであ

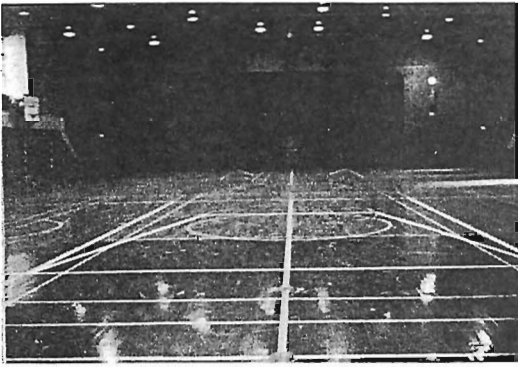
配置図



2階平面図



1階平面図



体 育 館

る。

体育の授業では卓球、バドミントン、バレーボールが行われ、それにクラブ活動ではバスケットボール部、ハンドボール部が加わり、テニス部も時折使っている。

一般学生も休講時や昼休みなどによく利用しているので、活用頻度は体育施設のなかでは最も高い。体育の授業のない時やクラブの使用時以外は、準備室に備え付の使用簿に記入すれば、用具の貸し出しと使用を認めているので、利用していただきたい。また時間外や休日使用は学生課にある用紙に記入のうえ学生部（係、望月）の認印を貰って学生課へ提出すれば、支障のない限り使用出来るので、どしどし使って欲しいものである。

その他、1階には男女夫々の更衣室、シャワー室、ト

イレがありフロア入口に準備室、階段がある。

2階は柔道場、剣道場だけとなっており、体育授業の雨天時にトレーニングルームとして使用されるが、普段はクラブ活動のみに使用されている。

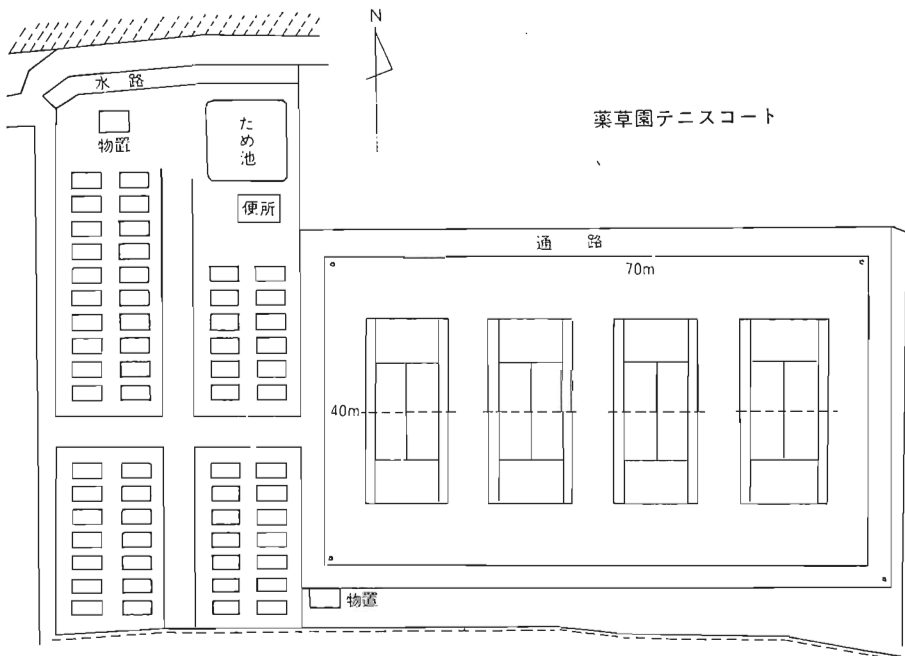
薬草園テニスコート

本学グラウンドの説明で前述したようにS30年代～S40年代にかけて本学校舎の増築はグラウンドを非常に狭くしたため、S43年薬草園として購入された6286㎡の土地は約2800㎡をテニスコートとし、その周囲の道を含めると約3500㎡と云った面積が割譲されて本来の薬草園が肩身を狭くしている感じである。

テニスコートは4面あって軟式2面、硬式2面に分れ



テニスコート



て、夫々がアンツーカーコート1面ずつ、クレーコート1面ずつとなっている。

本学から菓草園コートまで歩いて7~8分の離れた所にあるので体育の授業優先使用とし、それ以外はほとんど全ての管理は軟・硬両テニス部に任せてある。体育の授業では本人の希望で軟式か、硬式かどちらか一方を選択することになっているが、特に片寄りのない限り本人の希望通りになっている。授業以外の一般学生が使用希望を提出することはほとんどないが、時折、助手の方から休日使用の願い出を持って来るが、クラブと話し合いのうえ使用している。



野遠グラウンド

野遠グラウンド

本学から最も遠い所にあり、最も広い面積を有している体育施設である。遠いと云っても歩いて10分足らずで、準備運動を兼ねてジョギングするには良い距離である。

校舎の増築と学生の定員増、大学院の設置など必要に迫られて、S52年度に完成したグラウンドである。敷地面積12873 m^2 であるがグラウンドとしての使用可能面積は10000 m^2 に少し足りないようだ。サッカーが86.5 $m \times 75m$ 、ラグビーが90.5 $m \times 66m$ と最小限で許容される範囲である。

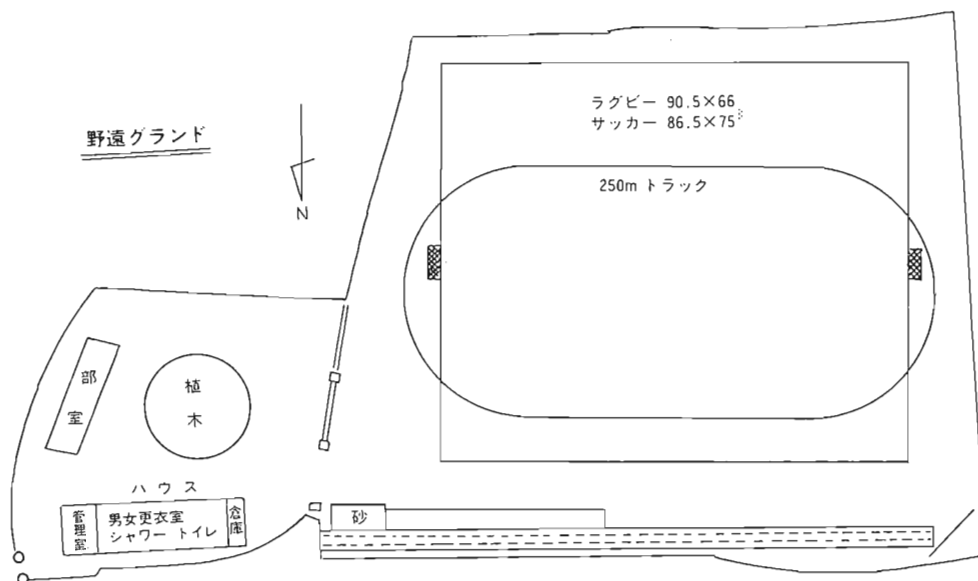
体育の授業では2回生男子がサッカーを行っている。その他陸上競技、野球、サッカー、ラグビーの各部が曜日制とか時間制で使っているが、シーズンが4月~7月と前期試験後の10月~11月中に重なるため、クラブ学生の休日使用の要望は強い。しかし管理人の休日確保やサ

ッカー・ラグビーの使用条件と陸上部、野球部の求める整地条件のちがいなど多目的利用の上で多少の問題が考えられる。何分にも離れた距離にあるのでテニスコート同様一般学生の使用希望はほとんどないと云ってよい。校友会のソフトボール大会、教職員の野球の練習が年に1・2回ある程度ですからシーズンオフに一般学生の使用を期待している。クラブハウスには男女更衣室、シャワー室、トイレ、管理人室、倉庫をもった1棟とクラブ室としての1棟が建ち、管理人が居るだけに体育施設の中ではグラウンドもハウスの内も1番手入りの行き届いた施設であるだけに使用頻度に物足らなさを感じる。

その他 (体育授業では使用していない施設)

女子寮テニスコート

このコートは女子寮の西側にあるアンツーカーコートである。1面だけで貸し出し専用である。ネット、コート



ブラシはコート内倉庫に置いてあるので使用希望者は学生便覧の使用規定に従った手続きをして頂きたい。ここは本学に近いこととテニス愛好者が多いのでよく使われている。

弓道場

女子寮テニスコート西隣には弓道場がある。S53年度に改築したばかりの立派な道場である。このスポーツは素人目には簡単に見えるが、姿勢（フォーム）、呼吸、精神統一が要求され一寸したはずみで矢が飛び出すので非常に危険な要素を含んでいる。それ故クラブ学生以外の使用は認めていないが特に使用したい場合はクラブ学生の付添と指導を受けることになっている。

新堂町校地

整地されないままの空地で6205m²の広さがあるので少

しぐらいの凸凹を我慢すればソフトボールぐらいは結構楽しめると思うが、学生にとっては整地されていない空地へわざわざ行くまでもないだろうと云った感じだ。

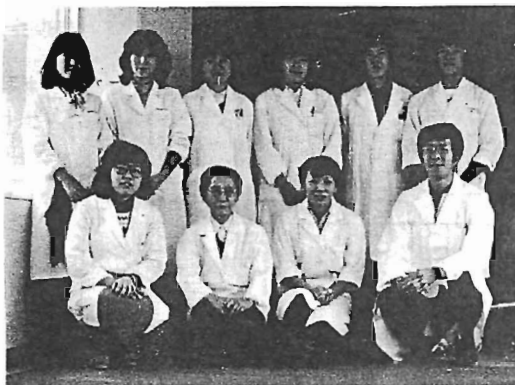
以上、本学の体育、スポーツ施設を紹介しましたが、施設は使うためにあり、使われない施設は無駄遣いと同じです。これを機会に学生便覧P34の規定に従って今後一層の使用頻度が高まることを期待しております。

また地域共存としての地元民サービスや、卒業生の就職先を考えた企業との友好理解を深めるためにも、一般社会への貸出しは施設の少ない日本では、労働時間の短縮、生活水準の向上に伴って、学校だからと云って学生のみを使用する場ではないと云った意識の芽生えつつある今日ですので、大学当局と共に考えてゆかなければならない課題であります。

●研究室だより●

生化学(I)教室

教授 川野 タツ



前列左より山本栄子助手、川野タツ教授、松村瑛子講師、与茂田敏院生、後列特別実習生6名

生化学Iの研究室は、目下私のほかに、松村講師、山本助手、与茂田大学院生、特別実習生6名で構成されているが、それらがB棟4階東寄りの唯一の実験室に、満員電車さながらにひしめいている状態である。しかし、それにもかかわらず、教室員は朝早くから夜遅くまで真剣に実験に取り組んでいる。

私共の研究室は、従来は主として栄養要求の厳しい微生物を用いて、化学的方法では不可能なビタミン、L-

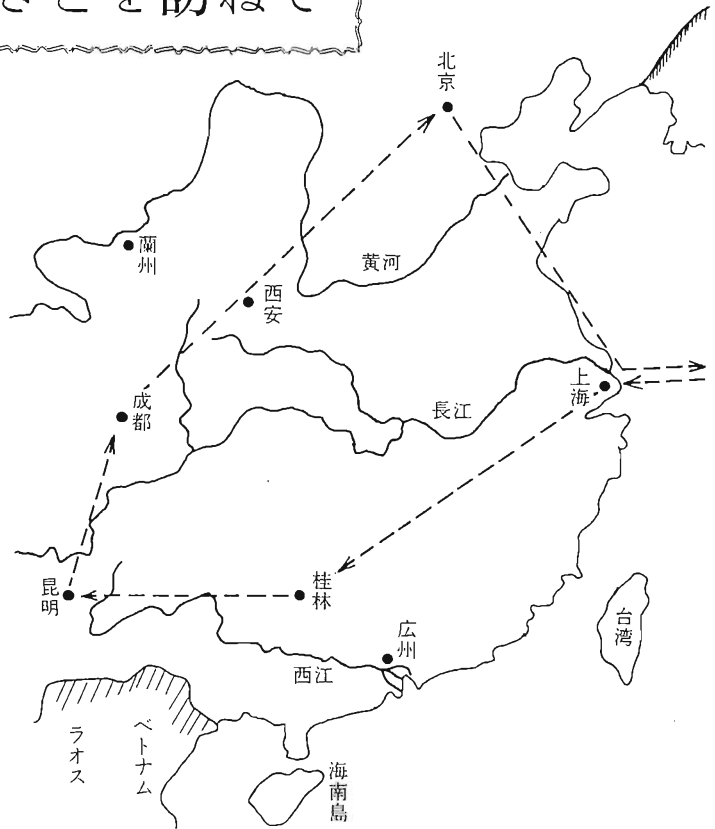
アミノ酸の微生物定量法に専念して来たが、数年前から微生物酵素を取り扱うことになった。微生物は酵素の宝庫ともいふべきで、特にその旺盛な増殖能力、広範囲な資化性、活性の多様性と特異性、豊富な種類と人工変異の容易性、高い均一性、季節や天候に支配されないなど、多くの点で動植物起源の酵素より優れているため、近年、微生物酵素の酵素学的また応用学的研究が盛んになり、将来ますます発展することが期待される。そこでその手始めとして、松村講師が中心になり、ペプチド合成の際の脱保護基反応を触媒する微生物酵素の研究に着手したが、何分にも本学における酵素研究設備は皆無に等しいため、その前途は誠に多難であるにもかかわらず、教室員全員が一致協力して、それらの困難を一つ一つ乗り越えて研究を進めて来た。しかし、研究が進むにつれて、設備だけでなく、酵素精製法をはじめとする酵素研究の基本的、専門的技法に関して更に広く深い知識が必要になり、昨年夏以来、松村講師が酵素化学、特に微生物酵素に関する有数の研究室として知られる、大阪府立大学農学部村尾沢夫教授のもとで研修することになった。それ以来、山積した種々の難問は次第に解決し、研究のテンポも急速に進展し、着々と成果をあげつつある。

私は本学に奉職して以来約30年間、一貫して、研究を通しての人格形成を学生の指導理念として来た。4年間の学生生活の総仕上げとして、短期間ではあるが、皆が協力して、共通の研究目標をめざし精魂を傾けることにより、お互に強い連帯感、友情が芽生え、また困難を乗り越える強靱な精神力が養われ、彼等の今後の長い人生に何かをもたらすのではないかと考える。

漢薬のふるさとを訪ねて



教授
小澤 貢



「四つの近代化」を目標に掲げる中国は今大きな変化を遂げつつある。私達生薬学関係の仕事に携わる者としてはこの漢方医学の祖であり、多量の生薬を輸出している中国の現状を実際に見聞することは非常に重要なことである。

今回私達は各方面の方々の御助力を得て、中国の中・南部の都市、上海、桂林、昆明、成都を駆け足ながら訪

問する機会を得た。私としては昆明、成都は1年置いての2度目の訪問であり、春と夏（昆明は乾季と雨季でもある）の自然を眺めることが出来、また懐しい友人との再会、研究面での話し合いが出来たのは、今回の訪中の目的の一つであったとはいえ、有意義な旅であった。また今回は本学以外から生物活性天然物質、薬用植物栽培、植物社会学といった面で造詣の深い先生方の参加を賜り、研究所、植物園、中医学院等の見学や中国の研究者、教育者との座談会などを非常に充実したものに出来、また種々な面で御教授賜ったことは私達にとって幸甚この上ない貴重な体験であった。

上海

清朝が阿片戦争に敗れ、南京条約により開港した地で、長江（揚子江）デルタの肥沃な地という条件にも恵まれたため外国経済の侵略地、外国との接点となった。以後黄浦江沿岸をはじめとして租界が設定されたが、上海租界、東洋の魔都といわれたこの地は、歓楽の都、万惡の地として100年近く悪名をはせることになる。



街の薬局（上海にて）



上海工業展覽館

現在の上海は勿論魔都のイメージは無いが、四つの近代化を進める中国の中では広州と並んで最も早く諸外国の影響を受けており、華やかな感じを受ける。

私達は正午頃に晴天下の虹橋空港に着いたが、冷房のきいた機内から出たとたん 35°C を超す熱気に煽られ、第一印象は「暑い」であった。しかし我々外国人の泊るホテルは一応どこもクーラーが入っており、二、三年前のような扇風機ということはなく、この点は有難かった。現地の人達の家には勿論クーラーなどは無く、どうにか扇風機が整い始めた程度であり、外貨獲得の目玉とはいえ外国人観光団最優先的なこの方針に対する彼等の感情はどんなものであろう。したがってこの暑さを逃がれるためか、昼間から黄浦江岸の木陰は沢山の人が出で、夜ともなると、日本のようにかじりつくテレビも無いせいも加わって、祭りの夜の賑わい以上の人が出る。

上海での私達の訪問先は中国科学院上海薬物研究所、人民公社の衛生院と薬草栽培圃場、そして中薬店であった。

中国科学院上海薬物研究所は1931年上海自然科学研究所として設立された施設に開校後開設されたもので、開設時には研究員が10名足らずであったのが、現在では職員数 500 名を超す研究所になっている。文革中に研究活動がかなり停滞したといわれるが、この方面では中国の最高水準を行く研究所であり、合成化学、植物化学、分析化学、薬理学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲおよび抗生物質部門と7部門

に分れ優れた研究が行なわれており、日本からの訪問者も多い。我々は座談会の後、生薬、天然物関係の研究室、標本室工場等を見学したが、標本室にも自然科学研究所時代の古い標本も保存されており、1931年から10年余をこの研究所で過された木村康一先生の集められた標本も保管されているとのことだった。

人民公社は南江県新場人民公社を訪問したが、衛生院は中規模病院といった感じで、前回広州で訪問した新塘人民公社の場合とよく似た規模であった。この衛生院には内科、外科、小児科、放射線室、鍼灸治療室等があり、鍼灸治療室は多数の患者がいて、日本でもおなじみになった、長く大きな鍼をツボに打っているのを見学させていただいた。ここで使う投薬用の生薬は一部自給もしているが、かなりのものを中央からの供給によって賄



新場人民公社衛生院投薬室にて

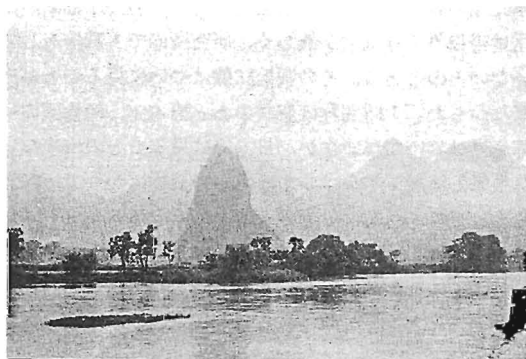


新場人民公社にて

っているとのことであった。したがって見学した薬草栽培圃場も112種類を栽培しているとのことであったが、比較的小規模のものであった。目についた主なものを挙げると、玄参、薏苡仁、唐牛膝、魚腥草、夏枯草、黄芪、蘇葉、益母草、丹参、白芷、青蒿、杜仲、白菊花、玉竹等である。この圃場の近くの河畔で栽培しているものが逃げ出し、半野生化したものと思われる白芷（セリ科）を見つけ少量ではあるが果実を採らせていただいた。現在薬草園で10数本が発芽し順調に生育している。白芷は鎮痛、鎮静、浄血薬として用いられる重要な生薬であり、中国では興安白芷、川白芷、杭白芷を原植物とするものがあり、日本産の和白芷（原植物：ヨロイグサ）とは形態、成分など少し異なっている。現在我々の研究室でも成分検討を行なっているが、今回採集した中国産白芷の成長によりさらに原植物の関係など検討が進められるのではないかと期待している。

桂 林

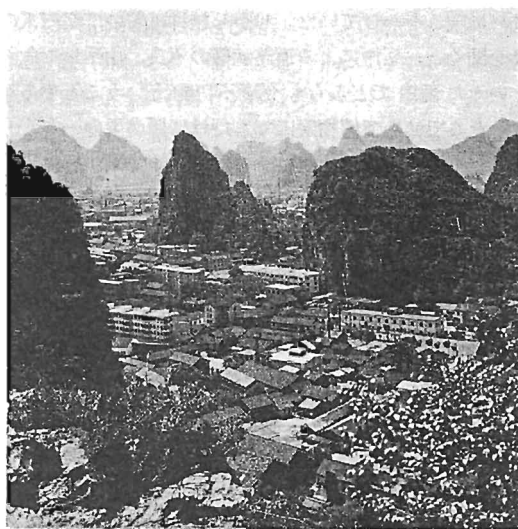
中国南部、広西チワン族自治区の東北部に位置するこの都市は三億年前石灰岩が堆積した海だった場所が地殻変動により陸地となり、風化、浸食などにより多数の奇峰を形成した典型的なカルスト地帯の中にある。山裾の少ない、筍のような山々とその間を流れる漓江を借景にキンモクセイを主体とした見事な並木を持つこの街は「桂林山水甲天下」と称され世界の美景中でも上位に入るといわれる。特に朝夕の霧に霞む奇峰の眺めは南面の



桂 林 の 朝



桂林漓江下り



登綵山より眺めた桂林の街

世界そのものであり、川沿いの散策は幽玄の境に遊ぶ感がある。またこの地は前述のように石灰岩地帯であり鐘乳洞が見られ、日本のものとは形の異なる大陸型の素晴らしい規模のものがある。有名なものとしては芦笛岩鐘乳洞が一般公開されているが、カルストの規模かう考えて探索を進めればさらに多数見つかるのではないかとと思われる。

この桂林の旅情は桂林市から水路陽朔にいたる約80キロの漓江下りにとどめをさす。今回は雨季の終りで水量

が多かったせいで予定より1時間近くも早い6時間程で下り終えてしまったが、それでも途中休みなく兩岸に続く奇峰の眺めはただただ驚き眺めるばかりであった。この素晴らしい桂林の街は景色の美しさのため、おびただしい数の観光客がおとずれるせいで、素朴さ、南画的静けさが失われ、世俗化した安っぽい観光地化が進み始めている。景観の素晴らしさ、幽玄境の静けさがこの街の最高の魅力であるが故に一抹の不定が感じられた。

私達はこの桂林においては茯苓(サルノコシカケ科)とこの地特産の羅漢果(ウリ科)の栽培地見学を希望事項として中国側に提出していた。ただ茯苓の栽培地(蒙山, 昭平)は桂林市内からはかなり遠くにあり可能性は少ないと予想し、比較的近くにある羅漢果の栽培地(永福)に望みをかけていた。しかし桂林に着いて案内人の話を聞くと、豪雨による道路状態の不良、山岳地で危険といった理由でどちらも見学不可能ということであった。そこでせめて植物園にでも行けば羅漢果の一本くらいは植えてあるのではないかと思ひ、植物園か植物研究所の見学を希望したところ、旅行社の方々の尽力もあり、広西植物研究所の訪問が許可された。この研究所に関しては私としては全く考えていなかった(というよりは知らなかった)所であるが、同行の水野瑞夫先生(岐阜薬大)によればかなり有名な植物研究所だとのこと、この点では皆に大いに喜んでいただき団長としては面目が立った次第である。

広西植物研究所は桂林市の南方、奇峰の連なる山脈



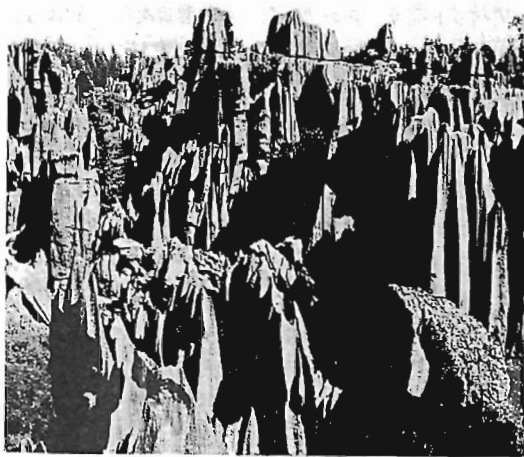
広西植物研究所座談会



石 林

をバックに水牛の遊ぶ放牧地を眺めながら車で1時間程走った所、雁山にあり、緑したたる樹々に囲まれた静かな研究所である。同研究所は1934年柳州に設立され、後この桂林近郊の雁山に移転して来た。設立当時所員は数人で、植物採集、文献等の収集に苦労されたようであるが、現在は300名近い構成員を持つ立派な研究所である。私達はここで所長の李樹剛先生等の出迎えを受けたが、羅漢果の特産地だけに、この生薬の成分研究をされた竹本常松先生(徳島文理大・薬、団顧問)の名はどの先生もよく御存知であり、旧知の間柄のように話はずんだ。李先生の話では羅漢果は温度条件等の関係で永福県の山岳地帯以外では栽培が難しく、研究所内でも栽培をしていないとのこと、その栽培状態はついに見ることが出来なかった。1時間程の懇談のあと標本室、植物園の一部を見せていただいたが、日本では見ることの出来ない羅漢果の液浸標本をはじめ珍しい植物ばかりで、各先生それぞれに得意の分野の植物を見るのに時間がかかり、旅行社の方々を困らせてばかりの半日であった。しかし予定になかった広西植物研究所を見学出来、研究所の各先生方と友好を深めることが出来たのは大きな成果であった。

この桂林では泊ったホテル(甲山飯店)が漓江の支流



石 林

沿いの山に近い所に位置していたため、夕方、早朝の自由時間にホテル周辺を散策出来、植物をほんの一部ではあるが観察出来た。ここで松岡敏郎先生（京都薬大）がサイコ的一种（葉序が180°という特徴を持つ。原植物名は現在調査中）が比較的多数生育しているのを見つけられたが、これがその後の諸先生方の植物、生薬調査熱を大いに高める源になったと思う

昆 明

中国西南部に位置する雲南省は日本の総面積と同じくらいの広さを持ち、数千米の高山が連なるチベットや四川省に接する西北部、省都昆明のある海拔千〜二千米の広大な雲貴高原、そしてラオス、ベトナムに接する亜熱帯と多様な気候風土を持つところである。したがって植物も豊富で四川省と並んで生薬の産地として有名な省である。またヒマラヤ、雲南は日本と植物分類地理的に密接な関連が有ると云われているし、照葉樹林文化、民俗風習の類似など民俗学的にも日本との関係がよく論じられるところである。

雲南省の中央やや東北寄りに位置する昆明は、台湾や桂林とはほぼ同じ緯度にありながら、雲貴高原のなか、標高二千米近い高地にあるため真夏でもかなり涼しい。ま

た北に梁王山脈、烏蒙山脈西に哀牢山脈を控える高原の盆地であり、さらに近くに面積340平方キロの大きな湖（滇池）を持つため冬でも摂氏7度を下ることがほとんど無いと云われる気候温和な地である。したがってまたの名を春城あるいわ花の都と呼ばれている。私は春と夏の二度訪れたが、三月中旬に訪れた時はサクラも終りに近く、ツツジ、シャクナゲの仲間や、キリの花が咲いており日本の4〜5月の気候であった。また8月初旬に訪れた時は、上海、桂林、成都がうだるような暑さであったのに対し、この昆明は涼しすぎるくらいであった。

このあたり一帯も太古は石灰岩の堆積した海底だったところであり、赤いられた土壌の中に雪をかぶったように見える白い石灰岩からなる山（カルスト）が眺められる。昆明に来たらぜひ訪れるとよい景勝地に西山龍門と奇観石林がある。龍門は地上千米に達する垂直な絶壁に呉来清道士が石工と共に72年の年月をかけて完成した仏道石窟で、遙か眼下に帆船の浮ぶ滇池の眺めは素晴らしい。また石林は二億七千万年程前は海であったところが、その後の地殻変動で陸地となり、長期に亘る浸食の結果出来た石灰岩の巨大な柱が林立する世界でも類を見ない一大景観地である。雲南は中国の中でも少数民族の多いことで有名であり、少数民族のつぼとも云われるが、この石林一帯にもそれらの人達が生活しており、美しい民族衣装を着た娘さんや子供が、母親達と道端に並んでめずらしい民芸品を売っている。

昆明には有名な中国科学院昆明植物研究所があり、そこを訪ねるのが私達のこの地における一番の目的であっ



雲南省サニ族の踊り（石林にて）



筇竹寺の五百羅漢

た。この研究所は1938年の創立で分類学研究室から出発し、現在では植物分類学、植物生理学、植物栽培、植物化学と拡張が進み研究者140人を超す立派な研究所である。この研究所からは呉征鑑所長をはじめ栽培関係の夏先生、日本語の達者な胡先生などがすでに日本へも来られたことがあり、また留学生として植物化学研究室から孫漢董先生（徳島大学薬学部）、揚崇仁先生（広島大学総合薬学科）が研究のため来日され、立派な成果をあげて今年春帰国された。さらに副所長の周俊先生は昨年秋に生薬学会年会、天然有機化合物討論会に出席され、本学をも訪問されたので面識ある先生方もおられる。

そういつたことで私達とはいろいろ関係の深い研究所であり、前回も今回もいずれも短時間の駆け足訪問であったが周副所長はじめ諸先生方の温かい御配慮により、研究室、薬草栽培圃場、植物園と案内いただき、また有意義な座談会と短い時間を有効に活用することが出来た。

この植物化学研究室で研究の進められている主な植物はキンボウゲ科のトリカブト属、三七人參を中心とするウコギ科のパナックス属、重楼などのユリ科パリス属、ツユクサ科の露水草（昆虫変態ホルモンを多量に含有する）、ウリ科のヘムスレア属、セリ科のアンゲリカ属、ヘラクレウム属、シソ科のラブドシア属、ラン科の天麻などの植物であるが、有名な生薬、各民族固有の民間薬などを多数持つ地のこと、今後多くの立派な研究成果があげられることであろう。

成 都

雲南と共に中国の西南部を占める四川省は西方に青海・チベット高原（青蔵高原）、南に雲貴高原、北には秦嶺山脈と囲りを山や高原にかこまれた盆地（四川盆地）である。温暖多雨な気候に恵まれ緑豊かなこの地はパンダ、金絲猿などの非常にめずらしい動物の生育地であり、高貴薬として有名なジャコウ（麝香）を採るジャコウヅカも棲息している。また薬用植物も非常に多く、大黃、沢瀉、当歸、川芎をはじめ繁用生薬が多量に産出する。成都はこの四川盆地の中、美しい川西平野の中央にある。気候温和で雨量が多く、さらに二千年以上も昔に李冰父子によってなされた水利灌漑工事のおかげで土地が肥え、水稻、小麦、綿花、搾油作物などの生育がよく綿花、搾油作物は中国における主産地の一つになっている。また三世紀の三国時代には知恵者で優れた政治、軍事家である諸葛孔明の助けで蜀の帝として名をあげた劉備玄德が魏の曹操、呉の孫権とともに中国を分割して雄を競ったときの都でもある。したがってこの成都には諸葛孔明、劉備玄德、彼等に従って活躍した武将らの塑像や玄徳の墳墓のある武侯祠など名所旧跡が多い。文化、文学史面では詩人杜甫が戦乱を逃がれて三年間過した杜甫草堂、唐代の女流詩人薛濤の住居であった望江樓、見事な舍利塔や五百羅漢像のある東漢（後漢）時代建造の宝光寺などがある。五百羅漢像についてはこの宝光寺のほか昆明の筇竹寺でも見たが、日本の仏像になれている私達にとっては表情などになじみにくいところがあり、



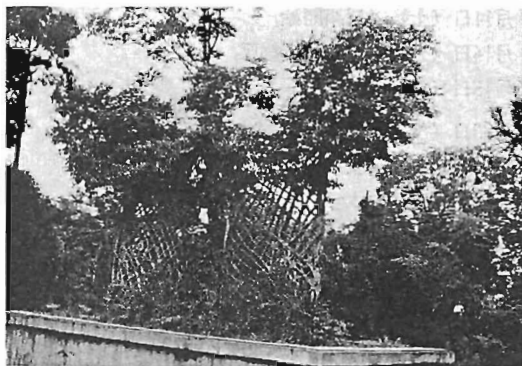
成都中医学院生薬標室

なかには妖怪じみた感じを与える像も見られた。

さてこの四川省は前述のように生薬の産地として非常に有名で、沢瀉、黄連（味連、雅連）、半夏、川貝母、川牛膝、川芎、当帰、大黄、冬虫夏草等上質の物が多く川の名がつく生薬も多い。例えば現在川芎（セリ科）の名前があたりまえになっているこの冷え症などの婦人病に用いる重要な生薬は、もともと芎藭の名で呼ばれていたものだが、品質の良い四川芎藭が有名になり、川芎と略されて呼ばれているうちにこの生薬の正名になってしまったのである。

私達もこの成都訪問にあたり種々栽培地などを検討したが、なにしろ四川省だけで日本の総面積に匹敵する広大な土地のこと、著名な生薬生産地はいずれも成都からの日帰りが困難なところや外国人一般には未開放の地がほとんどである。結局生薬、中医学面での学術的中心である成都中医学院の訪問と成都から車で2時間程で行ける比較的楽な灌県の梅花鹿飼育場（生薬鹿茸など鹿を基源とする薬物を生産）の参観に落ち着いた。

成都中医学院は北京、上海、広州の各中医学院と並ぶ中国の四大中医学院の一つであり、生薬学（中薬学）、中医学において指導的立場にある大学である。中医学部と中薬学部に分れており、中医学部は五年の修業年限で



幹を網状に仕立てたサルスベリの木（伏竜観にて）

伝統的な中国医学を学ぶが西洋医学も教科に入っている。中薬学部は修業年限四年で日本の薬学と似た教科内容である。この学院は私にとって二度目の訪問であり、前もって十分連絡がとれたこともあり、副院長の凌一揆先生、候占元先生、外事課の范家永先生の十分な御配慮のもと、前回の訪問時から見ると見違える程立派になった生薬標本室をはじめ中医学研究室、中薬研究室を見学させていただき、また中薬学、中薬化学関係の諸先生方との座談会と有意義な時を過ごすことが出来た。

梅花鹿飼育場（四川省中薬材公司灌県養鹿場）は成都の西北約70キロ、山岳地帯から雪どけ水を運んできた岷江がはじめて平野に出る所、灌県にある。総面積3.3ヘクタール、従業員60名の規模を持つ飼育場で、約1000頭の梅花鹿（マンシュウジカ、ニホンジカによく似ている）が飼育されており、鹿茸の出荷は年間約350キロである。ここではこの鹿茸のほか鹿尾、鹿冲（鹿鞭）、鹿筋、鹿血片なども商品化しており、外国人参観者用の休憩室にはこれらの品を展示し、即売もしているが、鹿を基源とする生薬以外にも川芎、当帰、党参などを玄関の売店で売るなど、なかなかの商売上手と見受けた。川芎などはこの灌県が栽培地でもあり、品質の良い品を置いている。

帰路、成都を「天府の地」たらしめる基ともなった李冰父子の働きで完成した大型灌漑施設、都江堰、その李冰父子を祀る二王廟、伏竜観を見学したが、山間地のためかにかわか雨にあい、植物の方が思うように調査出来なかったのは少し残念であった。



巨大な茯苓の標本（成都中医学院にて）

大学ごよみ

7月11日(日)	} 夏季休業
9月10日(金)	
9月11日(土)	授業開始
9月14日(火)	前期授業終了
9月16日(木)	} 前期試験
9月29日(水)	
10月1日(金)	後期授業開始
10月12日(火)	大学院入学試験
10月15日(金)	大学院入学試験合格者発表
10月16日(土)	} 第63回薬剤師国家試験
10月17日(日)	
10月18日(月)	} 前期追試験
10月21日(木)	
10月30日(土)	} 第17回大薬祭
11月2日(火)	
12月1日(水)	} 前期再試験
12月11日(土)	



後期行事予定

12月18日(土)	特別実習・特別講義選定
12月25日(土)	} 冬季休業
58年 1月7日(金)	
1月8日(土)	授業開始
1月17日(月)	後期授業終了
1月19日(水)	} 後期試験
1月31日(月)	
2月1日(火)	第7回大学院修士論文発表会
2月5日(土)	} 後期追試験
2月9日(水)	
2月11日(金)	入学試験
2月18日(金)	入学試験合格者発表
2月19日(土)	} 後期再試験
2月28日(月)	
3月2日(水)	特別実習発表会
3月4日(金)	卒業査定
3月7日(月)	} 最終試験
3月12日(土)	
3月16日(水)	卒業予定者・1～3回生進級発表
3月19日(土)	卒業式

国家試験の結果について

本年度秋に施行された薬剤師ならびに臨床検査技師の国家試験の成績は次の通りであった。

◎薬剤師国家試験

	受験者	合格者	合格率	全国平均合格率
第63回	20名	12名	60%	55.78%

◎臨床検査技師国家試験

	受験者	合格者	合格率	全国平均合格率
第23回	8名	3名	37.5%	22.4%

人事異動

退職 (57.8.31)

石田 真弓 助手 (生物化学Ⅱ)